

## 平成30年度きのくにコミュニティスクール推進フォーラム

- 1 日時・会場 平成31年3月3日(日) 10:00~16:00  
県立情報交流センター Big・U
- 2 参加者 教職員、保護者、地域住民、教育委員会関係者 等 合計383名
- 3 内容

### ◆オープニング 有田市立宮原小学校児童による活動発表

「ぼくらは 交通ルールを守ります」(歌・ダンス)  
「おじいちゃんのみかん」(歌)



### ◆講演 「コミュニティ・スクールとは ～導入から活性化に向けて～」

文部科学省初等中等教育局視学委員

全国コミュニティ・スクール連絡協議会 顧問 貝ノ瀬 滋 氏

- ・コミュニティ・スクールを形骸化させないためには、「なぜ、コミュニティ・スクールをするのか」を考えることが重要である。「子供たちのため」と信じ、主体的に自分事として、コミュニティ・スクールを続けていくことが大切である。
- ・日本最大の課題は、「少子高齢化」である。働き手が減少しているが、日本には人材という宝がある。その宝を磨くことが大切である。高齢者を支えていける優しい心を持ち、幸せな社会を作る人材を、学校、地域、みんなで育てていくことが大切である。
- ・超スマート社会を生きる子供たちに、自分で判断して、自分の言葉で語り、イノベーションできる力を育成していかないといけない。みんなが持てる力を発揮し、力を合わせて変化を乗り越えていける人材育成を、地域ぐるみ、社会全体とする。問題解決をしながら人材育成する仕組みがコミュニティ・スクールである。
- ・いいと思うことはみんなですればいい。地域と学校が目的を共有し、同じ方向を向いて子供を育てる。自分たちは何ができるのかを考え、それを少しでも実現できるような関係性を作れば、子供は健全に育つ。
- ・地域は学校の応援団であるという意識を変えていく。応援関係だけでなく、信頼関係、パートナーシップの関係を築くことが大切である。地域の住民には辛口の友人としてきちんと指

摘をしてもらい、学校と地域が共に課題を解決する。学校運営協議会に、地域の多様な考え方を取り入れ、改善していく。そのサイクルが、コミュニティ・スクールの仕組みである。

- ・学校運営協議会委員は、多くの地域住民を学校に巻き込んで、学校の課題を理解してもらうよう、学校運営協議会の様子を広報し、地域にアピールすることが大切である。
- ・コミュニティ・スクールは、地域を巻き込み、地域住民のこと、社会のこと、みんなのことを考えるきっかけとなる。まちづくりに結びつき、究極の住民自治に結びつく。



- ・子供たちが、地域の中で楽しく暮らしている人と触れ合うことによって、郷土の大切さに気付く郷土教育が大切である。そのような人々と心のつながりを持つことができた子供たちは、何らかの形でふるさとに貢献するのではないかと考える。コミュニティ・スクールという地域・学校・家庭が一緒になって子供を育てるシステムのメリットは大きい。

## ◆地方別交流会

### ○和歌山市・伊都・那賀地方

#### テーマ：「地域とともにある学校に向けて、今できること」

「オープンウィンドウ64」を簡略化した手法を用い、「子供の安全」、「学校と地域の距離を近づける（協働）」、「話し合う（熟議）」、「続けていく（持続性）」の4つ視点をもとに、具体的な取組や考えを交流した。

参加者の話し合いから「課題の共有（理解）」、「子供たちのために」、「協働性」、「子供を知る」、「見える・知る・つながる」、「コミュニケーション」、「つながり・笑顔」、「声かけ」等のキーワードが出された。



#### 【参加者からの声】

- ・日頃出会わない人と意見交換できてよかった。やはり、地元をしっかりと感じる体験をさせた教育をしておかないと、ふるさとに戻ってこようという子供にはならないのではと強く感じた。

### ○海草・有田地方

#### テーマ：「地域みんなで子供の未来を考えよう」

「地域の子供がどのように育ってほしいか」についてビジョンを出し合い、それを実現していくためのアイデアをワークショップ形式で話し合った。

各グループからは、「ふるさとを愛する子供に育ってほしい」、「あいさつのできる子供に育ってほしい」、「コミュニケーション能力を育てたい」などの意見が出された。

それを実現するためのキーワードは「つながり」であり、「人とのつながり」、「地域とのつながり」、「子供を取り巻く大人同士のつながり」を築いていくことが大切である、とまとめた。



#### 【参加者からの声】

- ・ いろんな職種の方と交流し、「子供のこれから」について考えを出し合うことは大切だと感じた。
- ・ 他校種の方や地域の方と話す機会はとても有意義であった。

### ○日高地方

#### テーマ：「わたしはこう動く！～地域の子供のために～」

参加者でグループを組み、共通のテーマについての議論を「見える化」し、論点を整理するため、文字だけでなくイラストや枠などを駆使した「グラフィックレコーディング」の手法を用いて、交流会を行った。

3色のポストイットの使用し、青色に自己紹介（コミュニティ・スクールに関しての各校、各地域の現状）、黄色にキーワード（今日の講演を聞いて気づいたこと）、桃色に「わたしは、こう動く！」（地域の子供たちのためにできること）を書いて熟議を行った。「教職員の意識を高める」、「情報共有」、「学校を核とした地域づくり・人づくり」等の意見が出された。



#### 【参加者からの声】

- ・ 地方別交流会で、地域の人、小学校、中学校、高校の4者で交流できたのでよかった。
- ・ 地方別交流会のスムーズな運営方法が、参考になった。

### ○西牟婁地方

#### テーマ：「大人の輪が広がるために～新年度に向けて～」

「自分は子供にどう映っているか？」、「子供と接する時に意識していること」、「自分が子供の頃に身近にいた格好良かった大人」、「新年度に向けて」について、ホワイトボードミーティングを行った。

「子供の感性は鋭いから、大人も気を抜いてはいけない」、「誉めるところを探すよう意識している」、「子供に地域の良さを教えてあげる」などのキーワードが、ホワイトボードに記された。



#### 【参加者からの声】

- ・ 自分の目の届く範囲をその人の社会だとすると、社会はとても広く大きなものである。コミスクは、その「交通整理」の意味もあるのかなと思った。
- ・ 違う分野の方々との交流ができ、直接話げできたことで、自分の意識改革にもなった。
- ・ 次年度の取組へのヒントになった。学校に戻って職員と共有したい。
- ・ 県内で同じ思いを持った仲間が集まり、勇気をもらった。これからも開催して欲しい。

## ○東牟婁地方

### テーマ：「地域の子供たちの健やかな成長を願って」

#### ～学校運営協議会の模擬熟議体験を通じて～

参加者が4つのグループに分かれ、それぞれのグループで学校の先生役、保護者役、地域の人役といった役割を決めて模擬熟議体験を行った。

熟議は「スマートフォン」、「防災訓練」、「学級懇談会」、「部活動」の4つのテーマの中から1つをそれぞれグループに割り当てた。防災訓練がテーマのグループでは、「マンネリ化について」、「避難訓練の回数について」、「保護者、地域の協力について」などの意見が出された。



#### 【参加者からの声】

- ・コミュニティ・スクール設置におけるさまざまな課題についても周知しておく必要があると感じた。模擬熟議は、考えの共有やすり合わせ、合議の過程などを体験できてありがたかった。
- ・熟議を経験して思ったことは、結論は出なくても新しい考えが生まれるということだった。今後、学校運営協議会でも取り入れたい。
- ・多様な意見から学校運営協議会の発展に向け、大きな力と示唆をいただいた。

## ◆パネルディスカッション

### 「あなたの力が必要です！ ～みんなで、楽しく、続けるために～」

#### パネラー

文部科学省初等中等教育局視学委員  
全国コミュニティ・スクール連絡協議会 顧問 貝ノ瀬 滋 氏  
NPO法人まちと学校のみらい 代表理事 竹原 和泉 氏

#### コーディネーター

和歌山大学 地域イノベーション機構  
地域活性化総合センター  
生涯学習・リカレント教育推進室 准教授  
きのくにコミュニティスクール推進協議会 委員 西川 一弘 氏

## ○竹原 和泉 氏による講演「このまちにはたからがいっぱい～い！」

- ・子供の成長には、「時間軸と空間軸のつながり」、「大人同士のつながり」が大切である。時間軸と空間軸が繋がったときに、子供は健やかに成長していく。子供の未来に対して、先生や保護者ですら全てに関わっているわけではない。部分的にしか関わっていないので、大人同士が繋がらないといけない。そのつながりを生む仕組みの一つが「きのくにコミュニティスクール」であると考えられる。
- ・コミュニティ・スクールは「地域総掛かりで子供を育てる。」という考え方が基盤になっている。新しい考え方ではなくて、「おらが村の学校」としてどこでもあった考え方を仕組みにし、継続的に保証するシステムである。

- ・子供たちが新しい時代を生きるためには、「学び続ける力」や「自ら考える力」、「人と協働的に物事を作っていく力」、「へこたれず前に進み続ける力」等が必要であると言われている。この力を養うために、地域というリアルな世界とつながることが大事である。地域と子供たちをつなげるのが、コーディネーターや商店街、公民館等である。



- ・何か足りないから補完する支援ではなく、異なった立場の人が、どのような子供を育てたいかを共に考え、同じ目的のために、対等な立場で活動する「協働」に結びつけていく事が大切である
- ・コミュニティ・スクールを根付かせることで、次の世代が自分のまちに愛着を持つ契機になっている。

## ○パネルディスカッション

### Q 1 議論の技法や会議の進め方を学ぶ事が大事ではないか

- ・技術・技法の洗練化の工夫は必要である。大事なことは全員参加である。声の大きい人や特定の人意見だけで議論をまとめることなく、みんながイコールパートナーとして発言し、意見をまとめる。それが合議である。
- ・ワークを活発にする道具（円卓の形をしたホワイトボード）の活用もある。

### Q 2 地域人材が高齢化して、困っている。どの様に取り組めばいいか

- ・地域の高齢化は進んでいるとは言っても若い人や学生もいる。やはり学校運営協議会は地域の代表なので、地域を見渡してふさわしい人を選ぶことが大切である。また、委員の任期が何年なのかも重要である。
- ・人材はすごく大切。例えば、町内会の会長にお願いするのではなく、町内会から1名出してくださいと頼むと、毎回素晴らしい方を選んで、出てきてくれるようになったという経験がある。キャリア教育や環境教育に協力してくれる企業など視野を広げて、学校のテーマやめざす教育の姿に協力してくれる方を選ぶといい。



### Q 3 現役世代、保護者の世代に学校運営協議会に出てきてもらう工夫は

- ・出やすい時間帯を設定する。夕方、夜や土日に設定するなど工夫する。地域代表の選出には、公募もある。また若い人の枠も作るといい。

### Q 4 生徒会の代表を学校運営協議会に関わってもらうには

- ・オブザーバーという形で生徒会の代表を入れる。高校生は選挙権があるのだから、主権者教育の見地から準委員として関わりを持ってもらうと、協議会自体も活性化する。

- ・生徒会が年に1回学校運営協議会委員と懇談している学校もある。高校生などは、オブザーバーとして参加してもいいのではないかと。ドイツでは人事やお金のこと以外は出席している。

## **Q 5 学校運営協議会の委員として関わり続けてもらうために必要なことは**

- ・やる気が持続するかどうかは、自己実現ができていくかどうかである。委員として参加したが、「発言できない。」「発言したが取り上げてくれない。」等が続くとやる気は持続しない。みんなが参加できる熟議にしていくことが大切である。
- ・小さな成功体験を積み重ねていくことが必要。コミュニティ・スクールの看板を掲げてもすぐに成功体験ができるものではない。みんなと相談して実行し、みんなが良かったねと思えることが必要である。コミュニティ・スクールは漢方薬だと話す先生がいた。まさにその通りで、じわじわ効いてきて、必ず体質改善になる。ゆっくりではあるが、着実に変わってくる。このことが持続する時の力となる。

## **Q 6 学校運営協議会の意見や要望を、どこまで、どの程度あげていけばいいのか**

- ・学校運営協議会としての意見は、法律的に尊重しなければいけない。小中学校の場合は、設置の市町村教育委員会に意見を出す。一般的な人事に関する意見は、校長先生や市町村教育委員会を通して、県教育委員会に上がる事はある。意見は尊重されるが、必ずその通りになるということではない。それぞれのところから色々な意見が出るので、全てをかなえることは難しいが、最大限努力してくれる。
- ・校長先生だけで意見を言うよりも、学校運営協議会という後ろ盾があるので強いと思う。しかし、それが100パーセント実現するわけではない。横浜市では、要望が実現できない場合は、誠実に返してくれる。



## **Q 7 次の教育の波は何か**

- ・社会に開かれた教育課程に密接に関係して、コミュニティ・スクールが動いていこうかと思っている。今までつながっていた地域と学校が、カリキュラムにも関わるようになる。
- ・次の時代の教育のキーワードとして「自立」、「協働」、「創造」の3つがある。具体的には、今、和歌山県が進められている教育改革は正解だと思う。次の教育の展開としては、「個別最適化」と「つなぐ・つながる」がキーワードとなる。「個別最適化」とは一人一人に合った教育や学びを保証することであり、「つなぐ・つながる」とは心と心、人と人のつながりを大切にすることである。心と心がつながった地域の方々と子供たちが本物の体験をすることで、地域に心から愛着を持つ。最先端の技術を使いながら、郷土への思いを深められる教育をしていくことが大切となる。

## **Q 8 「きのくにコミュニティスクール」の取組へのエールを**

- ・県教育委員会や各地方教育支援事務所の方々が、これだけ一体感のあるチームとなっていることが素晴らしい。そこに今日集まった皆さんのように、熱心に一日研修することはなかなか

かない。地域もチーム学校の一員であると思っている。チーム学校として、地域とともにある学校として、進めていってほしい。

- ・次の和歌山県の10年に向けたキーワードとして、「コミュニティ・スクール」が走っていく。「きのくに共育コミュニティ」が「きのくにコミュニティスクール」につながったのが和歌山県の財産である。

#### ◆参加者から（アンケートより）

- ・コミスクから生まれた宮原小の取組は、とても素晴らしかった。（小中学校教職員）
- ・オープニングの宮原小学校児童の歌が心に残った。（市町村教育委員会職員）
- ・貝ノ瀬先生の話が具体的で、コミュニティ・スクールの良さが分かり、進めていきたいと感じた。参加してよかったです。（市町村教育委員会職員）
- ・御講演では、当事者あるいは現場レベルの目線で、「どのように推進させていけばよいのか。」について大変参考になる御示唆をいただいた。地域とともにある学校づくりを進める上でのヒントをたくさんいただいた。（県立学校教員）
- ・コミュニティ・スクールに取り組んで1年。貝ノ瀬先生のお話で、自分たちの取組が間違っていないことを確認することができた。また、次にどのような方向に進めば良いのか、その時のバックボーンを得ることができ、有意義なものとなった。（小中学校教職員）
- ・コミュニティ・スクールの仕組みや背景等について理解が深まり、勉強になった。ありがとうございました。（学童保育関係者）
- ・パネルディスカッションでの竹原先生の話がとても分かりやすく、すっきりした。「つなぐ」、「つながる」ということは、「心」であるということが心に残った。（市町村教育委員会職員）
- ・講演会は素晴らしく、パネルディスカッションも興味深かった。（社会教育関係者）
- ・子供たちのためにいいと思うことは、みんなでやった方がいい、という講師先生のお話が参考になった。ありがとうございました。（県立学校教職員）
- ・パネルディスカッションを、Q（質問）に答える形で進めてもらったのは、とても良かった。日頃感じていた疑問のいくつかのヒントがもらえた。（小中学校教職員）
- ・貝ノ瀬先生、竹原先生のお話は魅力的で、一字一句聞き漏らすまいという思いで聞かせていただいた。今後の取組の参考になるお話がたくさんあった。（小中学校教職員）
- ・パネルディスカッションでの西川先生のコーディネートが、とても分かりやすかった。  
（学校運営協議会）
- ・交流の時間も良かったのですが、パネルディスカッションでたくさんの御意見を聞くことができてよかった。（保護者）